

みんなの健康ラジオ

『保険適応における
体外受精治療法のバリエーション』

(2022年12月1日放送)

横浜市産婦人科医会

みなとみらい夢クリニック

貝嶋 弘恒

体外受精といっても、
対象の患者さんの年齢、卵巣機能により
治療法が異なってきます。

治療法として一番バリエーションがあるのが、**排卵誘発法**です。
小さい卵子の入った袋（卵胞）を、薬で成長させる方法です。

保険では、卵胞を計測する超音波検査の回数、
それに伴うホルモン採血の回数に限度が設けられています。

その限度内の排卵誘発法に沿った治療が求められます。

保険＝ある程度パターン化した治療法

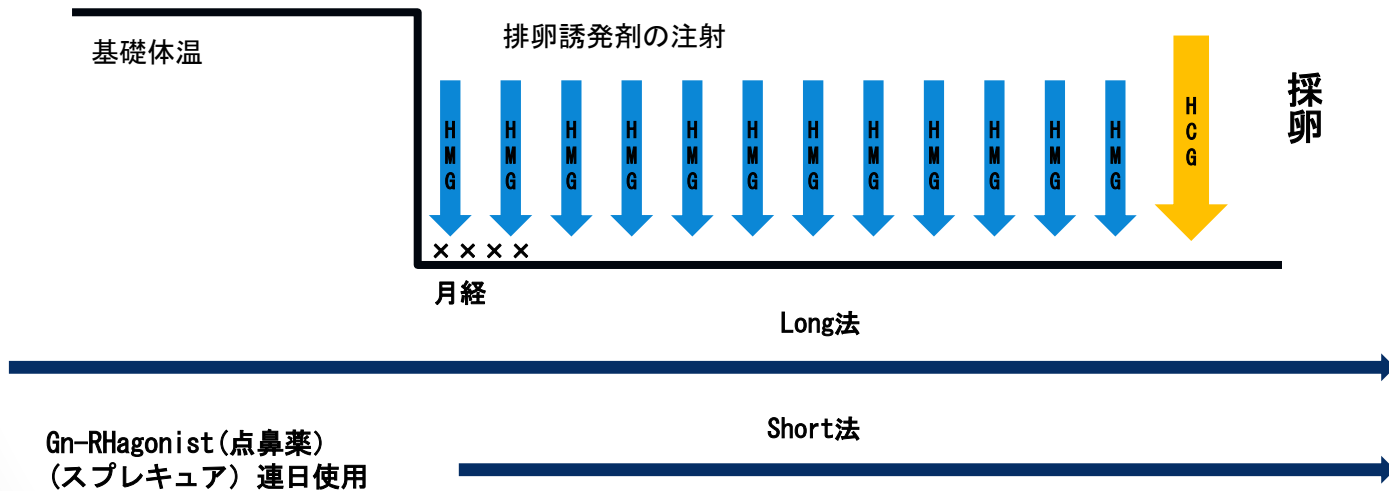
具体的な排卵誘発法

① 30代前半の比較的卵巣機能が良好な患者さん

自然に出てくるホルモンをコントロールして、注射を多用して
たくさんの卵子を得る = **高刺激法**

卵巣が腫れたり、卵子も多くとれるため、
できた胚は、いったん凍結して次周期以降で移植するケースが多い。

具体例：ロング法、ショート法



注射を多用する例：ロング法、ショート法、アンタゴニスト法等

② 30代後半、もしくはは卵巣機能がやや低下してきた患者さん

自分が出すホルモンを利用して卵胞を育てて採卵させる方法
=**低刺激法**

内服薬の排卵誘発剤を使用する

具体的には、クロミッド、フェマーラ

必要に応じて誘発剤の注射を併用

高刺激法は、薬剤で排卵をコントロールしやすく、
保険適応として治療しやすい。

低刺激法は、患者さんの卵巣の反応によって決まるため、
ある程度、治療の型にはまった動きをしてくれるケースでないと
保険適応が難しいが、工夫する事により可能と考えます。

保険は、どの体外受精の治療法も細かく設定されています。
ただし、採卵まで至る方法も、使用できる薬剤も制限があります。

高刺激法？低刺激法？

保険適応可能か否か？

どの治療方法がベストなのか、保険適応内で可能なのか
よく担当医と相談して決めましょう。

体外受精といっても、いろいろなやり方があり、それに伴っていろいろな薬剤を使用します。



令和4年4月から、不妊治療の保険適応

体外受精の技術料だけでなく、使用する薬剤、検査等も保険適応です。（制限はありますが、。。）

治療費はリーズナブルとなり、身近な治療となったのではないのでしょうか。